

電子書籍



を出す人は
知っておきたい

文章術

プロのライターが教える
裏ワザテクニック

どんな原稿も必ず格上げする

「秘伝」公開！



安藤
智子



はじめに

私は人に職業を訊かれたとき、表向きは単にライターとしていますが、厳密に言うならゴーストライターということになります。なぜゴーストなのかといえば、本来いるはずのない存在だからです。私と同じように陰の仕事に従事している人は、出版社が集中する首都圏を中心に、おそらく何千人、何万人といえることでしょう。

読者のみなさんは、本を読み、この本を書いたのは表紙に名前が出ている著者その人だと信じていらっしやるに違いありません。矢沢永吉の『成り上がり』はエーちゃん自身が書いたのではなく、コピーライターの糸井重里が代わりに書いた、というか聞き書きしたんだよね、と知っている人は少なからずいても、大学教授や学者、医師や弁護士といった人々が専門分野の本を出すときはもちろん他人の手を借りずに自分で書いているはず、と信じて疑わないでしょう。

でも実は、そうではないことがしばしばあるのです。

著者が非常に多忙で原稿執筆の時間がとれないとか、この先生はいいネタをたくさん持つているが文章を書かせるとまるで駄目、というような場合、出版社の編集者はライターを起用します。

ライターは編集者に伴われて著者に会いに行き、著作に盛り込むべき意見や主張を詳しく伺います。取材時にはまだ先生方の考えが明確に言語化されていないこともあり、そんなときは先生を質問攻めにして話を引きだし、使える情報と使えない情報をふるいにかけるなどして整理をしたのち、いかにもその先生が書いたように原稿をまとめていきます。

著者が何を訴えようとしているのか、ライターは著者と同等または著者本人よりもよく理解してはじめて良い原稿が書ける、と言えるでしょう。

これは簡単なことではありません。関連図書を何冊も読まないと理解できないこともありますし、単行本1冊につき、10万字近い文字を書き記していかね

ばならないのですから、けっこう重労働です。

ライターが四苦八苦しながら代筆に取り組んでいる間、著者の先生はほかのお仕事をなさっています。そして約1ヶ月後（場合によっては数ヶ月後）、先生は仕上がった原稿をチェックし、特に問題がなければ、ご自身の書いたものとして本を出版されます。

そこに書かれている文言はすべてライターの手によるものですが、内容そのものは著者の意見にほかなりません。ですから、著作はやはり著者のものです。本が完成した時点で、ライターはその存在を消すことが求められます。

なんとも虚しい仕事、とお思いでしょうか。

ところがそうでもないのです。私のように書くことが好きな人間にとって、たとえゴーストであっても、ライター稼業は一度やったらやめられません。仕事を通じて文章修業をさせてもらえるうえ、ギャラまで頂戴できるのですから、

こないいいことはないと私は思っています。

文章というものは、書けば書くほど上達します。天賦の才があってもなくても、なぜかうまくなってしまうという気がします。

それに加えて、私は、著者が提供してくださる草稿を手直しすることや、同業のライターが着手した第一稿に加筆修正を施すよう、編集者から求められることもあります。要するに未完成原稿をリライトして完成させていくわけですが、こうした作業がまた、文章修業にうってつけです。

読みやすい文章と読みにくい文章、わかりやすい文章とわかりにくい文章、その違いがどこにあるのか、はつきりとわかるようになったのは、私の場合でいうと、他人の書いた文章を修正する機会に恵まれたからです。

自分の思いや考えをスラスラと書けたらいいなと願うなら、自分以外の誰かが書いた文章（それもできるだけまずい文章）をリライトしてみるに限ります。「これを書いた人、何を言おうとしているのか、さっぱりわかんないよ」

というような難物に遭遇したときこそ絶好のチャンスです。その難解な文章を、一読ですつと理解できる文に書き換えることができたなら、筆力は確実に向上しています。

ライティングスキルをアップする秘策は、他人の文章をリライトすることです。自分の書いたものを添削してもらっても効果は薄いようです。病は必ずぶり返します。現に、私が毎度リライトしているある方は、間違いを何度指摘してもいっこうに改まりません。

自分の欠点は気づきにくいという証拠です。

けれど、他人の欠点はよくわかります。

だからこそ、人のふり見て我がふり直せ、なのです。

他人のあら探しをしながら、「自分だつたらこう書く」という意識を持って読むくせをつけるといいですね。

どんな文章も、ただ読んで終わりにしてしまふのはもったいない。どこか引つ

かかるものを覚えたら、リライトを試みるよう促されているのだと私はとらえています。

文章を読むのと書くのでは、頭の使い方がまったく違っていいほど異なりますが、「自分だったらこう書く」と考えながら読むことで、「読む」と「書く」の2つを同時に脳内で行なうことができます。すると脳に新たな神経回路がつくられ、言葉を自由自在に操れるようになる、つまり文章の達人になれる、というのが私の実感です。

読者のみなさんにもぜひその醍醐味を体験してもらいたい。そんな思いをこめて、この本を書きました。読みにくい文章、わかりづらい文章のサンプルを豊富に列挙し、私だったらこうリライトするという例を示しました。リライトの練習、あるいはシミュレーションとして、ご一読いただければ幸いです。

安藤智子

【目次】

●はじめに………2

●序章 活字文化と電子書籍について私も考えてみた

・「俺にも言わせろ」と言える時代………14

・編集者不在のデメリット………18

・活字文化の水準とクオリティを保つために………24

・最初は間違いだらけの文章でいい………28

・読みやすく、わかりやすい文章を書きたい………33

・推敲のコツを覚えよう………36

・頭が良くなる文章レッスン………42

・書けば書くほど上達する………46

・ 人の文章をリライトしてみよう……………	52
・ 文法を基礎から学び直そう……………	56
● 第1章 日本語文法のおさらい	
・ ライターだから感覚的にわかる「伝わる文法」とは?……………	62
・ 日本語の書き言葉の変遷……………	65
・ 文の基本構造は「主語＋述語」……………	74
・ 背骨の「ねじれ」に注意……………	77
・ 主語は文のはじめに示そう……………	83
・ 主語と述語はできるだけ近づける……………	90
・ 文法用語の定義と用法……………	94
・ 日本語の品詞いろいろ……………	101
・ 「です・ます」の使用注意点……………	105

- ・「ら抜き言葉」は、やはりNG……………112109
- ・「さ入れ言葉」は、完全にNG……………112109
- ・使役の表現「せる・させる・しめる」……………117
- ・「てにをは」の賢い使い方 パート1……………120
- ・「てにをは」の賢い使い方 パート2……………126

●第2章 誤解されやすい文はどこがいけないのか

- ・修飾語は被修飾語の近くに置こう……………134
- ・修飾語、長は短よりも先に出そう……………137
- ・修飾語、重要なものから先に出そう……………139
- ・必要な句点を忘れずに打とう……………141
- ・読点はどこで打つべきか……………143
- ・言葉の出し惜しみをしない……………148

- ・接統詞の乱用を避ける……………153
- ・「または」と「および」を混同しない……………158
- 第3章 マイナスレベルの文をプラスに転換
 - ・敬語を正しく使うと文章の格が上がる……………162
 - ・間違えやすいのは、尊敬語と謙讓語……………168
 - ・「くどい表現」を排除する……………172
 - ・「手垢のついた言葉」は使わない……………177
 - ・矛盾することを書かない……………180
 - ・あいまいな書き方をしない……………185
- おわりに……………189

序章

活字文化と電子書籍について
私も考えてみた